From 岡 山

「ジャパンレッド」発祥の地、備中吹屋を行く

今夏は旧吹屋小学校内覧イベントを予定し、7～9月には人気のボンネットバスが特別に走る日も

ベンガラ格子や石州瓦に彩られた紅色の町並みが印象的な岡山県西部の吹屋ふるさと村。2020年6月に「『ジャパンレッド』発祥の地～弁柄と銅の町・備中吹屋～」として日本遺産に認定され、脚光を浴びている。そんな吹屋の歴史と魅力について、ふるさと村 村長の戸田誠さんに尋ねた。

銅とベンガラで栄えた「ジャパンレッド」の発祥地

吉備高原の緑濃い林間の坂道を車で走ると、標高約500mの山間に突如として紅色の美しい町並みが現れる。岡山県高梁市成羽町にある「吹屋ふるさと村」は、銅とベンガラで栄えた鉱山町であり、今もベンガラ格子や石州瓦が施された紅色の商家が軒を連ねている。

「ベンガラ（弁柄）とは赤色顔料の一種。吹屋産は品質の良さで全国的に知られ、寺社の鳥居や建物をはじめ、九谷焼や伊万里焼、輪島塗など日本を代表する伝統工芸品にも使われてきました。そんな日本のイメージカラーである『ジャパンレッド』を創出したとして、2020年6月に『日本遺産』に認定されました」と村長の戸田誠さんは語る。

吹屋の歴史は、平安時代初期の807年に吉岡銅山が開坑されたことに始まる。室町時代は尼子氏、戦国時代は毛利氏が所領し、江戸時代はほぼ天領に。日本屈指の重要な鉱山だったことがうかがわれる。

明治時代には、三菱財閥の創業者として知られる岩崎弥太郎が、最先端の洋式溶鉱炉や発電所などを導入して近代化。その功績を称えるように、この地にある山神社の鳥居には、今も三菱マークが残っている。

明治末期～大正時代には約1,200人が働くほどの規模に達し、本部の敷地を譲り受けて現在地に移転した旧吹屋小学校には、大正時代に369人の児童が通っていたとか。

一方、ベンガラが造られるようになったのは江戸中期のこと。銅山で廃棄された硫化鉄鉱から、ベンガラの原料となるローハ（緑礬）の凝結に成功し、本格的な製造が始まった。鮮やかに発色する吹屋産のベンガラは、1877年の第1回内国勧業博覧会で第一等を得るなど、その優れた品質が認められ、全国的に需要が拡大。製造に携わった片山家や広兼家などの旦那衆は巨万の富を得て、島根県の石見や出雲から瓦職人や宮大工を呼び寄せ、吹屋独特の紅色の商家を建造し、現在に残る美しい町並みを整備したのだとか。

「鮮やかな色ばかりが注目されがちですが、ベンガラは防腐・防虫効

果があり、建築素材としても優秀です。上質な巨木を惜しみなく使い、腕の立つ宮大工が年数をかけて建てたからこそ、今も吹屋の町並みが残っているのでしょう。吹屋に訪れる機会があれば、建物の贅沢さや意匠にも注目してみてください」

製造業から観光業へ 2020年6月に日本遺産に認定

明治から大正にかけて栄華を極めた吹屋だが、「交通の便の悪さや継承問題など、様々な理由から1974年に吹屋でのベンガラ製造は中止となりました」と戸田さん。

ベンガラ製造に代わる新たな基幹産業となったのが「観光」だ。1972年には住民たちの手で吹屋観光協会が発足。1974年に県が制定した地域の景観を保護する「ふるさと村」事業の指定地区に選ばれ、翌年から約10年かけて、広兼邸や笹畝坑道などの改修、バンガローや休憩所などの新築が行われた。

「吹屋ふるさと村」として開村した1977年には、映画「八つ墓村」のロケ地として話題となり、鉱山町として全国で8番目の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定。その後も経済産業省の「近代化産業遺産」認定や、国土交通省の「都市景観大賞」受賞などを経て、2020年6月に文部科学省の「日本遺産」に認定された。こうした一連の活動は、トップダウンによるものでなく、郷土の歴史や文化に親しみと誇りを抱いていた住民たちが自発的に取り組んできた成果であることも興味深い。

「かといって、決して無理はしていません。地域に愛着を持つ住民一人ひとりが、自分たちにできることを少しずつ積み重ねてきた結果かもしれません。住民の人柄の良さや温かさも、吹屋の魅力だと思います」

地域の温かさに魅了された若い移住者が新たな担い手に

歴史情緒あふれる町並みや、住民たちが生み出す温かな雰囲気にひかれて、吹屋では近年、20代、30代の若い移住者が増えているという。地域おこし協力隊として訪れた若者が、この地で結婚して子供に恵まれたり、ベンガラ染に魅了された芸術家が、研究を重ねてカラフルなベンガラ染を売る染物屋さんを開店したり……。ゲストハウスで夏休みに行う大学生の村留学、お試しで短期間住める家の提供など、ハード面で受け入れ体制を整えていることも功を奏しているようだ。

最近では、進学や就職で吹屋を離れざるを得なかった40代、50代の住民たちに代わり、若い移住者が地域の担い手となり活躍を始めているという。

「ふるさと村の運営組合が休憩所として営んでいたうどん・そばのお店は、高齢化で運営が危ぶまれていましたが、移住者の男性が麺打ちと味を継承。今は『二代目ふるさと村休憩所 吹屋食堂』の暖簾を掲げ頑張っています。また、ふるさと村基金で作ったものの、管理ができなくなり放置されていたバンガローを、別の移住者が改修し、宿泊できるようになりました」と戸田さんは嬉しそうに語ってくれた。

ほかにも、吹屋のお土産を開発・販売して新たな価値と市場を生み出している人、「花めぐり」や「ベンガラート展」などのイベントを企画して吹屋を盛り上げている人なども。

自らの故郷を大切に守り続ける代々の住人たちと、その地にひかれた移住者たち。そんな吹屋を愛する人々が、手と手を取り合ってまちの発展に取り組んでいる姿こそが、吹屋の最大の魅力かもしれない。

取材・写真提供／
（一社）高梁市観光協会 吹屋支部

2022年に再公開予定の旧吹屋小学校

最後までベンガラ製造を続けた田村家の工場跡地は、現在「ベンガラ館」に

吉岡銅山の笹畝坑道は近代化産業遺産の1つ

二代目ふるさと村休憩所 吹屋食堂

紅色の美しい町並み

「吹屋ふるさと村」の村長、戸田誠さん